

黒門

(1) 内門（一の門）

黒門は現在、本丸への唯一の入口である。しかし、19 世紀後半以前は、この門は城主や高位の訪問者が使用するためのものであった。また、北東にある小さな門は、武士や労働者が日常的に使用するものであった。

黒門とは、文字通り「黒い門」という意味であるが、必ずしもその色から名付けられたわけでない。むしろ、この門の目的を反映したものである。この門が建てられた当時、「黒」は公的なものを連想させる色であった。建物や部屋の名前にも「黒」ががつくのは、公共的な役割や用途を反映したものである。

黒門は 1871 年に取り壊され、現在の内門は 1960 年に再建されたものである。現存する設計図がなく、設計者の市川清作は名古屋城の門を参考にしたと言われている。1960 年の門の建設にあたっては、1950 年代に行われた城の修理で保存されていた屋根瓦を再利用した。この瓦には松本城の歴代城主の家紋が描かれているものが多い。

(2) 外門（二の門）と中庭（枳形）

黒門の枳形は防御策として作られたもので、本丸に入ろうとする敵は、枳形で一の門を破る前に火縄銃の攻撃にさらされることになる。現在の外門は 1989 年に再建されたもの。

太鼓門

江戸時代（1603-1867）には、二の丸への主要な出入り口として太鼓門があった。明治時代（1868-1912）、城内の多くの施設と同様に、門と周囲の石垣の一部が取り壊された。

現在の太鼓門は、1700 年代初頭に描かれた城下町の絵図をもとに、1999 年に建てられた。門に使われているヒノキは樹齢 400 年であるが、門の大きな横木には樹齢 140 年の松材が使われている。門の東側には狭間があり、そこから弓やマスを射ることができる石落としも設置されている。

元の太鼓門の建築年代は不明だが、石川氏が城主だった 1590 年から 1613 年の間に建てられたとされる。太鼓門周辺の発掘調査により、この時代の金箔を貼った瓦が発見され、現在、松本市博物館で展示されている。

(1) 太鼓楼

北側門台上に太鼓楼があり、鐘と太鼓が備えられていたことから、太鼓門と呼ばれるようになった。太鼓と鐘は、時刻を知らせたり、非常時の合図を周囲の町に知らせたりするために使われた。

(2) 玄蕃石

松本城で最も大きな石は、玄蕃石と呼ばれ太鼓門の角にある。高さ 4.5m、直径 1.5m、重さ 22.5t と推定される。この石を城まで運ぶには、大変な人手が必要であつたろう。

松本城二代目城主の石川康長（1554-1643²）は、山から引きずり出された玄武岩の上に乗ったという伝説が残っている。石川は、玄武岩の上に乗る、山から引きずり出すときに、労働者の一人が文句を言うと、石を降りて、その人の首を切り落とし、槍の先に突き刺した。そして、石に登り返すと、槍を高く掲げて、皆に再び動き出すように叱咤激励した。このように、玄蕃石は、玄蕃頭の官職をもつ役所のトップを務めた石川にちなんで名づけられたと言われている。